

# 結核予防会職員として 今後を考える国際研修に参加して

結核研究所 国際協力部 企画調査課 小原 尚美  
結核予防会事業部普及課 主任 青木 新

2006年7月8日から11日までワシントンD.C.を訪れ、世界的なアドボカシー団体である「RESULTS」の国際大会に参加し、国際的な結核の問題について、その問題をいかにして政策に反映させるか、理論と実践について学び体験してきた。結核が、現在国際的な大きな問題であることを、身をもって実感し、またそのことに対して結核予防会職員として、今後どのように考え行動するべきか、大きな示唆を与えられた経験であった。

## ダイナミックな研修・講演

7月8日のセッションは、各組織のリーダーとなる人物に対する研修を行った。まず良い組織を作り上げるためには、最初に適切な人材を選ぶことが大事であり、組織を「good」から「great」にするためには、①人を訓練する、②考え方や思考を訓練する（しつける）、③行動をしつける、という3段階がある。人とつながりを持ち、人に活気を与えることが重要となることであった。次に、メディアや国会議員などにメッセージを伝えるためには、統計上の細かい数字よりも、「世界では結核が増えているのです」といった単純なものにして、多くの情報を提供せず、その問題に関連する個人的な話をすると効果的である。誠実・正直に話し、相手側に具体的に何をしたいかを必ず話すことが必要であることであった。

講義中、参加者から手が上がり、「オクラホマ州の国会議員に対して政策を訴え、様々なネットワークを使い、最初はあまり乗り気でなかった議員を最終的にはその気にさせた」という話が発表された。講義を聴いてすぐに自分のこととして反応するあたりに、積極的に学ぶ姿勢を感じた。また、研修の講演者はすべて「RESULTS」の職員であり、淀みなくつい聞いてしまう話し方や、参加者からの突然の質問へのスマートな対応などに見習うべきことがたくさんあり、組織としての意識の高さや個々の能力の高さを感じた。

7月9日は、まず午前中に参加者が全員集まり開会式を行った。全員で歌ったり、会場全体でウェー



日本チーム自己紹介

ブを行ったりして気分を盛り上げ、一体感を作り上げてから、団体ごとに全員がステージに上がり一人ずつ自己紹介を行った。その後、各国の活動報告が行われた。午後には、結核対策の現状に関する講演が行われた。『Betrayal of Trust: The Collapse of Global Public Health』の著者Laurie Garrettは、「先進国が支援しているNGOの職員は支援される国の職員よりも給料が高いため、人材がNGOへ流出しがちである。また、基金を受ける途上国では基金を効率的に消化しきれず必要とするところへ届いていない。短期的なその場しのぎのプロジェクトではなく、国家対策プログラムの人材育成や保健基盤を強化する国のシステム作りを支援する援助が必要である。援助する側が“どの国か”の優先順位を決めるのではなく、“国のどの保健対策”に優先順位があるか決める必要がある」と途上国への国際協力についての問題点を述べた。ケニアの結核対策プロジェクトの医師Dr. Jeremiah Chakayaは結核状況や国の対策について「国内の資金を結核対策に充てるように、国内のアドボカシー活動も必要である」と主張した。インドのアクションプロジェクトメンバーであるDr. Bobby Johnからは、世界の感染症対策のアドボカシー運動であるアクションプロジェクトの説明を行い「カナダ、日本、UK、US、などのそれぞれの担当者が結核及び結核エイズ二重感染の問題に対し、メディア活動を行い、アドボカシー活動をストップ結核パートナーシップと協力して展開

させている」と述べた。

## 世界銀行への訪問

7月10日の午後には、日本リザルツの職員とともに世界銀行を訪れ、日本理事室理事代理 大矢俊雄氏と面会した。大矢氏から、世界銀行の融資先がインフラ中心から現在では保健中心に変化してきていることを伺った。我々からは、世界の結核対策及びマイクロファイナンスに世界銀行からの更なる支援をお願いし、結核予防会の活動及び世界の結核と結核対策の現状について説明を行った。大矢氏から「要望は声を大にして訴えてきてほしい。その方が我々も案件としてあげやすくなる」との言葉も頂き、情報を提供しメッセージを伝えることの大切さを感じた。

7月11日には、「RESULTS」の他国団体メンバーとともに世界銀行を訪れた。世界銀行での面会では世界銀行側から3人、「RESULTS」から約15人が参加し、約1時間にわたり用意した質問に対して、回答を受けるとともに世界銀行の取組などについて丁寧に話を伺うことができた。世界銀行は援助を受ける国の必要とするものや優先順位を尊重しているため、国からの要請を受けてから支援を行う方針であるとのことであった。



世界銀行大矢氏へ説明

## 国会議員（テキサス州）への面会

世界銀行を訪れた間の時間を利用して、アメリカ国内団体のメンバーによる国会議員への面会に同行した。国会議員への面会では、普段は各地で活動をしている参加者が、アメリカ国内の結核の問題から国際的な問題まで幅広く訴えていた。議員会館の応接室でリラックスした形での面会で、メンバー全員が自分の言葉でメッセージを訴えている姿が印象的であった。



国会議員との面会（筆者は左の2人）

## 感想及び考察

「RESULTS」国際大会に参加して感じたことは、スタッフ・参加者を問わず意識と能力が高く、また団体の目的が明確であるということである。今大会では、問題提起（結核の現状の講演）、方法論の提示（メッセージを伝える方法の講義）、実際の行動（世界銀行や国会議員との面会）というサイクルを参加者全員で共有し、行動という結果を出すことで、今後のそれぞれの活動への動機付けにもなっている。知識の吸収だけでなく、自らの活動そのものがどういった結果を出したかが問われる大会であった。また、考察として、①ボランティア一人一人の能力とやる気を最大限に引き出し、組織を大きくしており、活動による具体的な成果を報告させ、その結果を分析し、次の計画に役立てている。②ボランティア及び職員の活動が本部によって支援されている。スタッフに対する指導と研修が徹底的に行われ、スタッフと本部職員との対話が多く、そのことが、職員のやる気を引き出している。③「RESULTS」はアドボカシーとマネジメント能力はあるが、実際の現場の知識と技術的知識が弱いと思った。アドボカシー活動の結果により、ある特定の疾患やプログラムにのみ多額の資金が使用されることは危険であると感じた。援助を受ける側が、自国の保健プロジェクトの優先順位を決めてそれに従って援助を受けることが望ましいと思った。④日本で結核の普及活動を行う際に、現在行っている活動を分析して改善していくような制度が必要である。厳しく監督される仕組みがあってもよいのではと考えさせられた。⑤国内の結核対策を幅広く支援してもらえるように、医学関係の機関をはじめ他の機関とのネットワークを強化する必要がある。同時に結核予防会や結核研究所を支持してもらえるようにPR活動を強化する必要があると思った。